

フーゴー・ヴォルフの書簡研究 ーフリーダ・ツェルニー宛 1894年2月から6月までー

梅 林 郁 子*

(2011年10月25日 受理)

Hugo Wolf: Letters to Frieda Zerny

UMEBAYASHI Ikuko

要約

本研究は、19世紀の作曲家フーゴー・ヴォルフ Hugo Wolf (1860-1903) が、恋人として親しい関係にあった歌手のフリーダ・ツェルニー Frieda Zerny (1864-1917) に宛てた1894年2月から6月にかけての書簡内容を対象として、二人の音楽的な相互関係を中心に、ヴォルフを取り巻く音楽的環境を考察するものである。当時ヴォルフは、初のオール・ヴォルフ・プログラム・コンサートを、歌手として評判を築き始めていたツェルニーを起用し、成功させている。一方でツェルニーも、ヴォルフから音楽的な影響を受けただけでなく、契約に関するアドバイスや仕事の斡旋など、具体的な支援を受けたのである。こうして、演奏活動では相互に影響を与えあった二人だが、この関係はヴォルフの創作活動を充実させるものではなかった。むしろ、フリーダから気持ちが離れ始め、再び作曲に専念することを決意した後で、ヴォルフの創作活動は、オペラとリート領域で最後の頂点を迎えることとなったのである。

キーワード：フーゴー・ヴォルフ、フリーダ・ツェルニー、書簡、イタリアのセレナーデ

* 鹿児島大学教育学部 准教授

1. はじめに

ヴォルフの書き残した文書は、全 2217 通にわたる家族、友人、恋人宛ての書簡の他、音楽批評文¹もあり、単純に資料の数のみでは、非常に充実しているように見える。しかし、特にこれまでヴォルフの書簡資料は研究において扱いにくく、その内容研究は、国内はもとより、国外においても全く進んでいない。その理由として、次の二点が挙げられる。第一に、これらの書簡は主に宛先の人物ごとに分類され、部分的に出版²されていただけであったこと。このなかには構成が非常に複雑であったり、編集におけるミスが見られたりする文献もあった。第二に、書簡や書簡に関連する資料が、オーストリアやドイツをはじめとした各国の図書館や個人所蔵など、ヨーロッパを中心にアメリカにも散らばっていることである。そのため、全体を俯瞰することは非常に困難な問題が伴うものであった。この状況が解消されたのは、ヴォルフ生誕 150 年にあたる 2010 年と 2011 年にかけてであり、ようやくこの機会に、現時点で判明している全書簡がヴォルフ全集の一環として全 4 巻で刊行されたのである (SPITZER 2010, 2011)。

このような背景により、これまで書簡は、評伝の事実補強などに一部が引用されているのみで、内容研究までには踏み込まれてこなかった。しかし、活字としての印刷資料が整った今後、自筆資料と併せて内容研究を進めることで、ヴォルフの自作リートに対する考え方、他の作曲者や演奏者に対する批評、そして彼に音楽的な影響を与えた人物など、彼と音楽の関わりを総合的な見地から明らかにできる可能性が開かれたのである。

そこで本研究では、その手始めとして、ヴォルフと恋人として一時期親しい関係にあった歌手のツェルニー宛書簡を対象に、書簡中の音楽に関する部分を抜粋、分類して考察することで、当時の彼を取り巻く音楽的環境を検討したい。

2. ツェルニーとの出会いと創作状況

ヴォルフは生涯を通じてリートを中心とした作曲活動を行っており、特に 1888 年から 1891 年までの 4 年間は爆発的な創作期にあたり、全リート 314 曲の約 2/3 にあたる 196 曲を作曲した。しかしその後、彼の作曲活動はぴたりと止まり、以後 1895 年に至るまで、完全なスランプ状態に突入することとなる。この間も、彼は新たな作品に取り掛かろうとあがいたが、結局全ては未完に終わり、完成した作品といえ、1891 年までに作曲を終えていたリートの管弦楽伴奏などによる編曲³や、1887 年に作曲した弦楽四重奏《セレナーデ *Serenade*》の管弦楽編曲といった、

¹ ヴォルフは 1884 年から 1887 年までに、「退役将校で、貴族の間で良く名の知られていたモーリッツ・エンゲル Moritz Engel によって創刊された」(WALKER 1992:148) 貴族階級の日曜版娯楽新聞『ウィーン・サロン新聞 *Wiener Salonblatt*』に、コンサートの批評文を書いていた。

² 例えば、友人のフーゴ・ファイスト Hugo Faißt 宛書簡集 (DRAHEIM; HOY 1996) や、恋人のメラニエ・ケッヒェルト Melanie Köchert に宛てた書簡集 (GRASBERGER 1964) など。

³ 例えば、1888 年に作曲したリート〈火の騎士 *Der Feuerreiter*〉の合唱と管弦楽伴奏による編曲や、同じく〈ミニヨン *Mignon*〉の管弦楽伴奏編曲など。

いずれも過去の作品の作り変えに過ぎない結果となったのである。

このようななか出会ったのが、ツェルニーだった。1894年1月29日、ヴォルフは友人のアーノルト・メンデルスゾーン Arnold Mendelssohn がダルムシュタットで開催したリートの夕べを聴きに出かけ、そこで歌った容姿端麗で、才能豊かなツェルニーに、一目惚れをした。この日のコンサートについて、2月2日、友人のフリーダ・リッパーハイデ男爵夫人 Frieda von Lipperheide に次のような報告の書簡を送っている。「マインツからいらしたフリーダ・ツィマー Frieda Zimmer⁴さんは、美しく、暖かみのある声で、そして充分な解釈を込めてソプラノ⁵のリートを歌いました。しかも、彼女は類稀なる容姿の美しさで際立っています。もうしばらくして僕がマンハイムを去るとき（中略）僕はとても愚かなことをし、彼女に惚れ込んでしまうのではと思うと恐ろしいのです」(SPITZER 2010 2: 302)。その後、彼女はヴォルフの友人でバス・バリトンのフーゴー・ファイスト Hugo Faist⁶ やテノールのコンラート・ディーツェル Konrad Diezel と共にシュトゥットガルト(2月7日)、マンハイム(2月8日)のリサイタルでヴォルフのリートを歌い、テュービンゲン(2月19日)ではヴォルフ本人も合流して、マチネーを開催した。テュービンゲンの後、ヴォルフはシュトゥットガルトのファイスト宅に逗留し、ツェルニーもマインツへ戻ることを延期して共にシュトゥットガルトで過ごして、そこで互いの恋愛感情が芽生えたのである。

その後も二人は親しい関係を保ち、ツェルニーからヴォルフへの書簡は失われてしまったものの、ヴォルフからツェルニーへは1894年2月27日から翌1895年8月7日までに全51通の書簡が送られたが、このうち半分以上は1894年2月から6月に書かれたものである。

1894年6月以降、ツェルニー宛の書簡数は激減した。それは、6月中旬、二人は再び数日間、密会⁷の機会を持つこととなったのだが、ここでヴォルフの気持ちに変化が起き、恋愛関係から次第に身を引き始めたことが理由である。元々、ヴォルフはツェルニーと恋愛関係になる以前より、ヴォルフのピアノの生徒であったメラニーエ・ケッヒェルト Melanie Köchert と恋人同士の間柄であった。ヴォルフと知り合ったとき、既に宝石商ハインリッヒ・ケッヒェルト Heinrich Köchert の妻であり、子どももいたメラニーエとの関係は決して公にはできなかったが、ツェルニーと交際中もケッヒェルトとの関係は維持されていた。そのため、ヴォルフがケッヒェルトに

⁴ ツェルニーは芸名で、ツィマーが本名。

⁵ ヴォルフはソプラノと評しているが、後にエンゲルベルト・フンパーディンク Engelbert Humperdinck のオペラ《ヘンゼルとグレーテル *Hänsel and Gretel*》でメゾの魔女役を務め、また「彼女の低く、色彩豊かなメゾソプラノ」(HILMAR; OBERMAIER 1978:4)といった表現から見て、深みのある声質が想像される。

⁶ ファイストはヴォルフの親しい友人で、本業は法廷弁護士でありながら、歌手としての活動も行い、ヴォルフの曲も多く歌う機会を持った。

⁷ ヴォルフは、この6月中旬のミュンヘンでの密会を、公私ともに誰にも知らせなかった。公には「僕は、ミュンヘン警察の申告書には、ロートの建築家のおしとやかな妻として申請することで、君の名誉を (H.I.N.200371 6月1日付)」保つこととし、私的には嘘をついて出掛けたため「僕の同居人たちは、僕が数日間グラーツで過ごしたことについて他の可能性を全く考えておらず、僕の親戚の状況をとても立ち入って尋ね」(H.I.N.200357 6月21日付)られることとなったのである。

宛てた書簡は、全てが公開されているわけではなく（恐らくは破棄されてしまい）、また、当時より書かれていた日記も、晩年「彼が発病した後、メラニー・ケッヒェルトによって処分された」（HILMAR; OBERMAIER, 1978: 66）ため、今後も明らかにならない詳細はあろうが、ツェルニーと別れた後、再びケッヒェルトと良好な関係を持続けたと考えられる⁸。

しかし、ツェルニーとの恋愛が順調であった1894年2月下旬から6月までは、ケッヒェルトに宛てた書簡はわずか11通であったのに対し、ツェルニーには31通と格段に多く、またツェルニーは歌手であったことから、この書簡には音楽に関する記述も多く含まれている。以上より、全51通のツェルニー宛て書簡より、特に1894年2月から6月に書かれた計31通を、本研究の考察対象とする。

3. 研究対象資料

ツェルニー宛書簡全51通の全自筆稿はウィーン図書館 Wienbibliothek im Rathaus に資料番号 H.I.N.200330 から 200380 で所蔵されている。また出版物としては、ヴォルフ全集（SPITZER 2010, 2011）の第2巻にツェルニー宛書簡が含まれている他、注などの情報が若干古いが、関連する写真や絵など画像の資料が豊富な書簡集（HILMAR; OBERMAIER 1978）もある。

今回は、2011年9月に行ったウィーン図書館での自筆稿調査を基に、2冊の出版書簡集を参考として考察を進める。【表1】にツェルニー宛書簡について、資料番号、記載年月日と記載地の一覧表を掲載するので、参照されたい。

8 3月1日付のツェルニー宛の書簡で、ヴォルフは「彼女（ケッヒェルト〔筆者挿入〕）は、君が僕を愛していることも、僕が君を愛していることも知っている。僕がマンハイムから彼女に宛てて、最後の手紙を書いたときからわかっていただ」と二人の恋愛をケッヒェルトが知ってしまったことを告げてはいるが「なぜなら、僕の心は君の、君だけのものだから — でもやはり、彼女を思う心もあるのだ。本当のところ — 彼女にも気持ちが残っている」（H.I.N.200331 3月1日付）という、ツェルニーに宛てたラブレターとしては、いささかふさわしくない心持を語っている。但し、この部分は翌々日には「僕の心は、彼女のものでもある、などと言ったのは狂っていたとしか思えない」（H.I.N.200333 3月3日付）と否定した。しかし、順調にツェルニーとの交際が進んでいる4月13日に、今度はケッヒェルトに宛てて、「ツェルニーさんに関してだが、彼女への振舞について、完全にあなたを安心させられると思う。あなたは本当に正しい。彼女はエゴイストで、全てのことができるけれど、愛することはできないのだ。（中略）もう、彼女を一目見ることもないだろう」（SPITZER 2010 2:362）という、完全に事実と矛盾した書簡を送っている。尚、ケッヒェルトとの交際はツェルニーとの破局後も続いた上、1897年の精神病院入院後から1903年に亡くなるまでも、ケッヒェルトは献身的にヴォルフの世話を続けた。ケッヒェルトはヴォルフが没して3年後の命日を迎えて後、自殺を遂げることとなる。

【表 1】 ツェルニー宛書簡一覧（記載年月日順）

	資料番号	年月日	地名		資料番号	年月日	地名
1	H.I.N 200330	1894. 2 .27	シュトゥットガルト	27	H.I.N 200371	1894. 6 . 1	ウィーン
2	H.I.N 200372	1894. 2 .27	シュトゥットガルト	28	H.I.N 200355	1894. 6 . 5	ウィーン
3	H.I.N 200331	1894. 3 . 1	ウィーン	29	H.I.N 200356	1894. 6 . 8	ウィーン
4	H.I.N 200332	1894. 3 . 3	ウィーン	30	H.I.N 200357	1894. 6 .21	ウィーン
5	H.I.N 200333	1894. 3 . 3	ウィーン	31	H.I.N 200358	1894. 6 .26	ウィーン
6	H.I.N 200334	1894. 3 . 4	ウィーン	32	H.I.N 200359	1894. 7 . 6	ウィーン
7	H.I.N 200335	1894. 3 . 7	デープリング	33	H.I.N 200360	1894. 7 .16	ウィーン
8	H.I.N 200336	1894. 3 . 8	ウィーン	34	H.I.N 200361	1894. 7 .29	ウィーン
9	H.I.N 200337	1894. 3 .10	ウィーン	35	H.I.N 200362	1894. 8 . 2	トラウンキルヒェン
10	H.I.N 200338	1894. 3 .12	ウィーン	36	H.I.N 200363	1894. 8 .17	トラウンキルヒェン
11	H.I.N 200339	1894. 3 .14	ウィーン	37	H.I.N 200364	1894. 8 .22	トラウンキルヒェン
12	H.I.N 200340	1894. 3 .17	ウィーン	38	H.I.N 200365	1894. 8 .30	トラウンキルヒェン
13	H.I.N 200341	1894. 3 .19	ウィーン	39	H.I.N 200366	1894. 9 . 6	マッツェン城
14	H.I.N 200342	1894. 3 .20	ウィーン	40	H.I.N 200367	1894. 9 .29	マッツェン城
15	H.I.N 200343	1894. 4 .21	ウィーン	41	H.I.N 200368	1894.10.10	マッツェン城
16	H.I.N 200344	1894. 4 .24	ウィーン	42	H.I.N 200369	1894.11. 5	ペルヒトルツドルフ
17	H.I.N 200345	1894. 4 .29	ウィーン	43	H.I.N 200370	1894.12.30	ウィーン
18	H.I.N 200346	1894. 5 . 3	ウィーン	44	H.I.N 200373	1895. 1 .17	ウィーン
19	H.I.N 200347	1894. 5 . 7	ウィーン	45	H.I.N 200374	1895. 2 . 8	ウィーン
20	H.I.N 200348	1894. 5 .10	ウィーン	46	H.I.N 200375	1895. 3 . 3	ウィーン
21	H.I.N 200351	1894. 5 .14	ウィーン	47	H.I.N 200376	1895. 4 . 5	ペルヒトルツドルフ
22	H.I.N 200349	1894. 5 .18	ウィーン	48	H.I.N 200377	1895. 5 .24	マッツェン城
23	H.I.N 200350	1894. 5 .22	ウィーン	49	H.I.N 200378	1895. 6 .21	マッツェン城
24	H.I.N 200352	1894. 5 .25	ウィーン	50	H.I.N 200379	1895. 7 .17	マッツェン城
25	H.I.N 200353	1894. 5 .26	ウィーン	51	H.I.N 200380	1895. 8 . 7	マッツェン城
26	H.I.N 200354	1894. 5 .29	ウィーン				

4. 音楽に関する内容の分類と考察

4. 1 分類

ツェルニー宛書簡における、広く音楽に関する記述について、【表 2】に内容の分類と該当する書簡の資料番号を示す。

【表2】音楽に関する内容の分類と該当する書簡の資料番号

内容	資料番号
(1) ヴォルフの演奏活動	200331, 200334, 200335, 200336, 200338, 200339 200340, 200341, 200342, 200346, 200347, 200351 200357, 200371
(2) ツェルニーの演奏活動	200331, 200335, 200336, 200345, 200351, 200349 200350, 200354, 200358
(3) ヴォルフの創作活動	200338, 200350, 200352, 200353, 200357, 200358

ツェルニー宛書簡では、ヴォルフの演奏活動についての記述が最も多く、これは当時、作曲家として次第に知名度が増してきたヴォルフの、自作演奏によるコンサートへの関心の高さを表していると捉えられる。また、続いて、恋人であるツェルニーの歌手としての演奏活動や契約についてが話題として取り上げられている他、自身の創作活動や、まだ曲にはなっていないが心に浮かんだ音楽的テーマなどが、取り上げられている。

全体としての特徴は以上であるが、次に、各分類について詳細に検討したい。

4. 2 (1)ヴォルフの演奏活動

当時のヴォルフは、多くの芸術的・社会的・経済的に力を持つ友人たちに恵まれ、彼らの尽力や仲介もあって、特にリートはオーストリア、ドイツでのコンサートで度々演奏されるようになってきていた。この点について、【引用1】の記述が見られる。

【引用1】 彼（ヨーゼフ・シャルク Joseph Schalk⁹〔筆者挿入〕）は、できるだけ早くここウィーンでリートの夕べを開催しろと執拗に忠告し、満員御礼になると保証してくれた。彼は今日またグートマン Gutmann¹⁰（ウィーンのヴォルフ Wolff¹¹のような人だ）とこれに関する話し合いを持つだろう。ファイストもまた張り合っており、僕は彼を呼び出すつもりだ。イエーガー Jäger¹²がテノールのリートを歌うので、僕はどうしてもそこへディーツェルを引っ張って行きたい。グラーツのポトベシュニク Potpeschnigg 博士¹³は、当地ですばらしいリートの夕べを開催させようと、あらゆる力を振り絞ってくれている。僕たちはまずウィーンで、

⁹ ウィーンのアカデミー・ヴァーグナー協会における芸術責任者。

¹⁰ アルベルト・グートマン Albert Gutmann。ウィーンのコルネリウス・エーゲンツ。

¹¹ ヘルマン・ヴォルフ Hermann Wolff。ベルリンのコルネリウス・エーゲンツ。

¹² フェルディナント・イエーガー Ferdinand Jäger。当時、ヴァーグナー作品の歌手として有名な歌手であった。

¹³ ハインリッヒ・ポトベシュニク博士 Dr. Heinrich Potpeschnigg。グラーツの歯科医で、ピアニストでもあった。

それからグラーツでコンサートを開き、そこからヴェニスとパランツァへ、そして神のみぞ知るあらゆるところへ行こう。(H.I.N.200336 3月8日付)

ここに記述されている人物は、皆当時の音楽・芸術界における実力者で、様々な形で活躍しており、ヴォルフのリートを高く評価していた。やがて、1894年4月3日には、ウィーンのペーゼンドルファーザールで、初めてのオール・ヴォルフ・プログラムによるコンサートが、ツェルニー、ファイスト、イエーガーの歌とヴォルフ自身のピアノにより開催されたのである。このコンサートの開催を前にして、ヴォルフはその成果をときには悲観的に、ときには楽観的に、ツェルニーへの書簡に記しており、コンサート前の不安定な心情が窺える。

【引用2】 ああ、嫉み深い神々よ！ 神々は僕たちに、何か悪ふざけをしかけたりしないだろうか — 幸運にも僕たちを支援してくれるコンサートの日取りももう決まっている。最後になって、君は決定的な瞬間に掠れ声に襲われ、コンサートを取り消さなければならない…なんとまあ、有難いことだ。そうでなければ、僕は君との再会を喜ぶあまり、突然友達の前で気が狂ってしまう — これも悪くないかもしれない。またそうでなければ…何のために壁に悪魔を描いたりするような真似をしているのだろうか？」(H.I.N.200340 3月17日付)

【引用3】 エックシュタイン Eckstein¹⁴ は君も、優雅で金持ちの仲間たちに売り込んでくれるだろう。哲学者たちと同様に、特に貴族のグループは君を歓迎するだろう。なぜなら僕たちはコンサートで、彼らの心を虜にするからだ。君もそう思わないか？ (H.I.N.200339 3月14日付)

最終的にこのコンサートは共演者や援助者など、多くの人々の協力を得て「批評の記録によると、プログラムの半分は繰り返される」(HILMAR; OBERMAIER 1978: 71) ほどの大成功を収めた。しかし一方で、好意を持って接する周囲の人物の思いを受けながらも、ヴォルフはいつもそれに対し、同じような親切を返すとは限らず、その口の悪さより、しばしば友人から「悪態つき Fluch」と呼ばれ、書簡にも自分の名として「悪態つき」と署名していることがある¹⁵。このような例として、例えばイエーガーは、ヴォルフを高く評価し、彼の作品を広めることに大きな役割を演じた人物であることから、フランツ・シューベルト Franz Schubert の作品普及に多大な貢献をしたヨハン・ミヒャエル・フォーグル Johann Michael Vogl とも比較されるほどの歌手

¹⁴ フリートリッヒ・エックシュタイン Friedrich Eckstein。アントン・ブルックナー Anton Bruckner の弟子で、裕福な家庭に育ち、上流階級の知人が多かった。

¹⁵ 例えば、H.I.N.200345 4月29日付、H.I.N.200346 5月3日付、H.I.N.200347 5月7日付の書簡。

(WALKER 1992: 213) であったが、ヴォルフは次のように評している。

【引用 4】僕はもう既に長いこと必要としていない、イエーガーの利用価値について判断を下すため、例外的にこのコンサートには列席するつもりだ。彼は、僕のお気に入り、自分が役に立つと公言している。(H.I.N. 200335 3月7日付)

また、4月7日の『ドイツ新聞 *Deutsche Zeitung*』朝刊には、先のウィーンでのコンサートに対する批評家テオドル・ヘルム Theodor Helm による文章が寄せられ、「彼の批評は価値を認めないどころか、とても好意的であった」(HILMAR; OBERMAIER 1978:73) にも関わらず、当時、グラーツで活動していた作曲者マルティン・プリューデマン Martin Plüddemann と比較されたことは、ヴォルフにとって全く気に食わなかった。

【引用 5】〔注意〕大ばかヘルムが書いた、僕たちのウィーンでのコンサート批評を同封する。ケルン大新聞の無駄口は、君が送ってくる前にもう知っていた。ああ、音楽評論家どもが！君も知っているプリューデマンは、音楽的にラクダと見做されている。それはもちろん、他のラクダが、彼と僕を線で結ぶことを妨げるものではない。(H.I.N. 200346 5月3日付)

ヴォルフの演奏活動については、もう一点付記すべきことがあり、それはアメリカでのコンサート・ツアー計画である。

【引用 6】昨日、アメリカにいる兄から便りを受け取った。兄は何度もこちらへ来てコンサートを開催するよう勧めてくれている。そしてドイツでは芸術は良く洗練されているが、アメリカではひとえに金目当てだ、と書いている。出掛けて行って、侵略するっていうのはどうだろう？ 上手く行くはずだと思うのだが。(H.I.N.200331 3月1日付)

このとき、ヴォルフの兄マックス・ヴォルフ Max Wolf は商用でアメリカにおり、兄から受け取った手紙をきっかけに、アメリカ行を考えるようになった。この目的のためには、ケッヒェルト家の家庭教師に英語を習い、また推薦状の取得にも尽力した (H.I.N.200334 3月4日付) が、最終的に実行には至らなかった。

このように、ヴォルフの書簡からは、ときに周囲に対する辛口な言葉も見られるが、多くの理解ある友人に恵まれたヴォルフの音楽的環境や、自作曲のコンサートに対する不安や期待、未来への夢など、おそらくは多くの若い音楽家が共通して持つであろう気持ちが読み取れる。一方でヴォルフはもちろん、常に自分のコンサートにのみ心を砕いているわけではなく、恋人ツェルニーの歌手としての演奏活動についても、様々なアドバイスをしている。次に書簡より、その部

分を取り上げてみよう。

4. 3 (2) ツェルニーの演奏活動

ヴォルフが作曲者として次第に知られるようになってきた当時、同じようにツェルニーも売出し中の歌手として、活動を開始していた。ヴォルフと知り合った頃のツェルニーは、オペラ歌手として舞台に立つ努力を重ねており、ヴォルフもその決意を励ましている。

【引用 7】 君は親戚の力を借りてでももっと良い状況を作り、君の、そして僕の心からの願いを叶えるべきだ。(中略) 彼らは腕を広げて君を持ち上げ、君を支え、そしてコンサート歌手としての経歴を持つ君をあらゆる点で後援してくれるだろう。(H.I.N. 200331 3月1日付)

【引用 8】 マインツでジークリンデの役を「初演」するために、君の全エネルギーを《ヴァルキューレ *Die Walküre*》上演計画に向けてみるのはどうだろう。(中略) オペラ歌手、とりわけヴァーグナー歌手の栄光があれば、君は最初から、さらにもっとアメリカ人たちに感銘を与えられる。(H.I.N. 200335 3月7日付)

当時ツェルニーは、バイロイトでリヒャルト・ヴァーグナー Richard Wagner の作品を歌うための勉強をしているところだった。同時に彼女は、コンサート歌手としてリートも多く歌っており、ヴォルフはツェルニーに、自分のリートを歌う歌手としての役割に専従することも期待したようである。

【引用 9】 ポルゲス Porges¹⁶ は、君が全権を与えられた僕の演奏者として歌うのを聴いて、きっと喜ぶだろう。(H.I.N. 200358 6月26日付)

しかし、非常に現実的な問題が、ヴォルフの夢の実行を阻んだ。それは、経済的困窮である。ヴォルフはやがて二人で共に生活することも視野に入れてはいたが、次第に作曲者として名が知られてきたとはいえ、二人の生活を支えきだけの経済力はなかった。

【引用 10】 僕については、神様のおかげで、いつも上手く収入の口を見つけている。僕を風や雷雨のなかに連れて行く人生という船は確かに小さく、壊れやすいが、男一人を甲板に留めておくには、まずまず十分な抵抗力はある。それでも積荷をひとつ放り投げると、船はぐ

¹⁶ ハイน์リッヒ・ポルゲス Heinrich Porges。『ミュンヘン最新新聞 *Münchner Neueste Nachrichten*』の批評家。

らぐら揺れ、ついには転覆してしまう。(H.I.N. 200345 4月29日付)

【引用 11】「どうすれば良いの？ 何が始まるの？」¹⁷(中略)僕は君に舞台から去るよう決意させ、そして君は、確かに僕の善意から出たものではあるが、まずいことに強要の表明に従ってしまうという形で、僕たちは二人とも罪を犯した。(中略) もう一度尋ねよう。どうすれば良いの？

何が始まるの？ そしてもう一度それに答えよう。舞台に出演するべきだ、と。君一人で、僕たちに来るべき悩み無き生活基盤を保証することができる。(H.I.N. 200345 4月29日付)

このような状況のなかで、ヴォルフは、ツェルニーにとって、そしてまた自分にとっても有利に働くかもしれない話を知り、喜び、報告している。

【引用 12】ところで！ イェーガー夫人を通じて、僕はモットル Mottl¹⁸ がアルトの女性（或いはメゾソプラノ）を探しており、イェーガー夫人の女子生徒と契約をするつもりだったことを知った。しかし、この女生徒は、モットル自身が契約する必要が無いほど、あまりに才能が無く、ほんの少ししか声も良くなかった。君が自分を制し、モットルと意見の一致を見ることができるなら、君にとってこれは、宮廷歌劇場に就職するという好機かもしれない。彼が君を下稽古の歌手として考えるか、ちょっとした問い合わせの手紙を書いたらどうだろうか。(中略) ただ、僕の名前は出さないで欲しい。(H.I.N. 200351 5月14日付)

実際、ツェルニーはモットルに連絡を取り、カールスルーエ宮廷歌劇場での下稽古歌手としての活動を始めることとなった。

【引用 13】カールスルーエの滞在に関する君の報告は、かなり希望に満ちているように思われる。部分的にではあっても、君がそこでそれほど好意的な歓迎を受けたことを、心から嬉しく思う。(中略) おそらくそれはうまく行き、しかももし、君がカールスルーエでしっかりした足取りで歩くことができれば、僕のことに対するモットルの興味も呼び覚まされるかもしれない。そうすれば、一石二鳥だ。(H.I.N. 200354 5月29日付)

ツェルニーは大変良い仕事をしたようで、ヴォルフをカールスルーエに売り込めたかどうかはともかく、彼女自身については本採用の話も出て「1894年8月に、彼女の契約が検討されたが、

17 1888年にヴォルフが作曲したリート、エドゥアルト・メーリケ Eduard Mörike の詩による〈少女の初恋の歌 *Erstes Liebeslied eines Mädchens*〉からの引用。

18 フェリックス・モットル Felix Mottl。カールスルーエ宮廷歌劇場の、任期付舞台監督。

彼女自身の意向により断ることとなった」(HILMAR; OBERMAIER 1978: 66)のである。翌9月にツェルニーがドレスデンの宮廷歌劇場で契約を結んだ後は、恋愛関係が冷めていたこともあり「ヴォルフは以後、フリーダ・ツェルニーの舞台を見に行くことはなかった」(ibid. 4)。先に述べたようにツェルニーは、当時ヴァーグナーのオペラを学んでおり、やがてこの成果はマインツにおける《ヴァルクレー》のジークリンデ役でのデビューに結びつく。後に彼女はヴァーグナー協会員として、コジマ・ヴァーグナー Cosima Wagner をはじめとしたバイロイト・サークルへの出入りも認められていき、舞台歌手として成功を遂げたのである。その意味で、ツェルニーは歌手として駆け出しであった当時、ヴォルフから芸術的にも精神的にも、また実際の仕事の斡旋という意味でも、支えを得たと考えられるであろう。

このように二人は演奏活動の点で、相互に影響を与え合っていたが、一方、ヴォルフの創作活動面において、二人の関係はどのように影響したのだろうか。

4. 4 (3) ヴォルフの創作活動

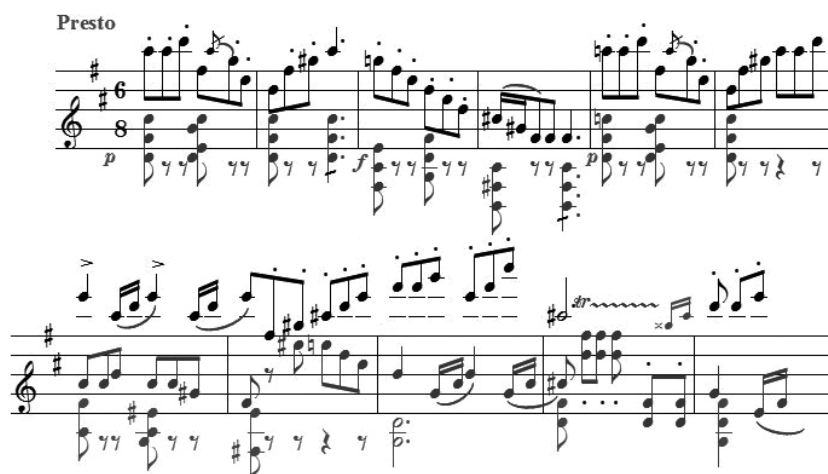
ツェルニー宛書簡のなかには、2 篇の楽譜が含まれている。ひとつは【図 1】の、1889 年にヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe の詩に作曲した〈ガニュメート *Ganymed*〉の一節で、詩は「君をしっかりと この腕に抱きしめたい」という、恋愛関係が始まったばかりのヴォルフの気持ちを込めた、自作リートの引用である。尚、この楽譜には、該当箇所のピアノ・パートもメロディーラインのみ書き込まれている。



【図 1】〈ガニユメート〉 mm. 17-20 (H.I.N.200333 3 月 3 日付)

それでもう1篇は、やはり恋愛関係が上手く行っていた3月に、スランプ状態のヴォルフの脳裏に浮かんだ、【図2】¹⁹のモチーフである。

¹⁹ 【図1】、【図2】ともにヴォルフの書簡全集に印刷楽譜として掲載されているが（【図1】は、SPITZER 2010 2:328、【図2】は ibid.:344-345）、特に【図2】について全集の印刷楽譜では、ヴォルフの自筆稿と比較すると、音の間違いがある（10小節目の ais^2 が全集では a^2 と臨時記号が落ちている）他、スタッカートの有無と符尾の向きが違っていたため、本稿は自筆楽譜に忠実な形で記譜した。



【図2】モチーフ断片 (H.I.N.200338 3月12日付)

このモチーフについて、ヴォルフは次のように述べている。

【引用14】 もう数日前から、この主題が頭に浮かんでいたのだが、作曲を実行するに値するか考えていた。その間に、この主題はだんだんと静かにしていなくなってきたので、僕は良い兆候と思うようになり、既にもうかなりの部分を、実際書き進めてしまった。これは《イタリアのセレナーデ *Italianische Serenade*》のスケルツォ部分となるだろう。効果的な作用を狙って、この部分は、とても速いテンポで演奏されなくてはならない。したがって、君が演奏するなら、小さな手でうまく、ちょっとはしゃいだ感じを出さなくてはいけない。そうでなくてはだめなのだ。僕にはかつて、仲間のためにあらゆる点で忍耐力を試されるようなことがあったのだ。君なら口笛で、もっと上手にこれを片付けられるだろう。トリルは気に入るだろうか？ (H.I.N.200338 3月12日付)

ヴォルフは1887年に作曲した弦楽四重奏曲《セレナーデ》を、1892年に《イタリアのセレナーデ》として、管弦楽編曲していた。この編曲は順調であったため、彼はこれを第1楽章として、全体を全4楽章の交響作品に作り変えようと考えていた。そして、この【図2】の楽譜は第3楽章の一部として構想されたのである。しかし結果として全ては未完のままとなり、現在では第2楽章30小節、第3楽章45小節、第4楽章40小節の草稿が残されているのみである。こうして、【引用14】では順調に進むかにみえた作曲活動は、またしても頓挫してしまう。そこで次に、ヴォルフはツェルニーとの恋愛、そして詩作に優れた彼女の詩²⁰から、再起を図ろうとする。

²⁰ ツェルニーが残している詩として、『思い出の書 *Gedenkblätter*』があり、その1として書かれた「フーゴ・ヴォルフのために *Für Hugo Wolf*」は彼が亡くなった後に、記されている。この詩は HILMAR; OBERMAIER 1978:5 に収録されている。

【引用 15】君も知っているように、ここ数年来、僕の創造の泉はまさに枯渇している。この恐ろしい感覚が僕に意味することは、筆舌に尽くし難い。あれ以来、僕は全くカエルのような存在になっている。しかも、生きの良いのではなく、電気ショック療法を受けているカエルだ。確かに僕は時折、明るく良い奴に見え、そしてまた、時として全く理性的に話すが、上辺を覆う皮膚の下では、魂が死の眠りに耐え、何千もの傷から心は血を流していることを神のみがご存知であるように感じられる。(中略)そして、不幸な状態のために、依然として呪われている僕を、この体面を傷つけられるような屈辱から、君が救ってくれることを期待している。僕に対する君の愛が、どんな暗雲も愛の地平線へと払いのける天空の虹であって欲しい。(H.I.N.200350 5月22日付)

【引用 16】君の心には、どのような詩的な春の息吹が生まれるのだろうか！ 君は幸運な人だ！ 再び君は僕を、今までにないやり方で、喜ばせてくれる。「おいで、君のリュートを花で飾ろう *Komm, ich kränze deine Laute*」は、可愛らしい作品だし、心に留めておくに値する。リュートが遂に鳴り響いてくるまで、僕はそう自分に言い聞かせるつもりだ。(H.I.N.200353 5月26日付)

しかしツェルニーの愛は、ヴォルフの創作力から暗雲を払いのけられず、また遂にリュートが心に鳴り響くこともなく、ヴォルフの気持ちは、ミュンヘンでの6月の密会を機に、ツェルニーから離れていく。彼の作曲に対する渴望と焦りは本物であろうが、書簡からは、愛が冷めつつある言い訳を作曲活動に帰しているとも読み取れないだろうか。

【引用 17】最近グラーツから、当地で企画されている音楽祭に、作品とともに出席の依頼を受けた。(中略)同時に、管弦楽編曲を克服するという点においては大きな困難があり、この仕事は熟考されるものとなるだろうから、僕たちの文通において僕の側でときどき遅れが生じても、君は絶対に僕を悪く取ることはない。僕はもうすぐ〈火の騎士 *Der Feuerreiter*〉の校正もするつもりで、特に〈妖精の歌 *Elfenlied*〉で味わった苦い経験の後では、それには入念に注意を払わなければならない。だからどうか、間を置くことにいらいらしないで欲しい。(H.I.N.200357 6月21日付)

そして、6月最後の書簡では、さらにフリーダからまた一歩退くとともに、全力で作曲に取り組む決意を表明するのである。

【引用 18】大事な君、だからまずは僕に一息つかせ、僕に超人的なものを求めないでくれ。
(中略) さしあたって僕は、もう一度正しい軌道に乗るように、全力で仕事をしなければならない。(H.I.N.200358 6月26日付)

以上から、演奏活動ではお互いに影響を与え合っていたヴォルフとツェルニーだが、この時期のヴォルフの創作活動においては、断片的なモチーフが浮かぶことはあっても、ツェルニーへの愛や彼女の詩が、直接に精力的な創作活動に結びつくことはなかったのである。

5. まとめ

本研究ではこれまで、ヴォルフが、恋人の歌手ツェルニーに宛てた全書簡 51 通中、特に親しい関係にあった 1894 年 2 月から 6 月に書かれた計 31 通の内容を考察することで、二人の間の音楽的な相互関係を含んだ、ヴォルフを取り巻く音楽的環境を考察してきた。

当時は二人とも、若く将来への希望に満ちた作曲者・歌手であり、ヴォルフはウィーンを中心として、多くの音楽的・経済的な実力者を味方につけ、知名度を上げ始めていた。このようなときに、ヴォルフの側では、ツェルニーと親しい関係となり、自作リート演奏会で、愛する彼女が歌うリートのピアノ伴奏を受け持つことは、アメリカでのコンサート・ツアー計画も含め、積極的に演奏活動に取り組むひとつの要因となったことであろう。また、ツェルニーにおいても、ヴォルフの依頼に応じて、一度は舞台歌手をあきらめる方向に進んだとはいえ、リートを歌うことでさらにコンサート歌手としての経験を積み、また彼から契約に関するアドバイスや舞台歌手のきっかけとなる仕事の斡旋などもあり、やはり、音楽的な影響を強く受けたと捉えられる。

しかし、作曲活動において、恋愛関係はヴォルフの創作意欲を燃やす直接の原動力とはならなかった。ツェルニーとの交際が順調であった期間も、彼は断片的なモチーフを作り出す程度の作曲しかできなかった。彼女から気持ちが離れ始めた 6 月最後の書簡で、全力で仕事に取り組む決意を述べた後、書簡自体は 7 月以降翌 1895 年 8 月まで、頻度は下がるものの書き続けられる。しかし、むしろ、1895 年初めには唯一のオペラ・ブッフア《お代官様 *Der Corregidor*》に着手し、年内には完成まで漕ぎ着けたこと、さらに 1896 年は《イタリア歌曲集 第 2 集 *Italienisches Liederbuch II*》をはじめとした最後の集中的なリート創作期に繋がることから鑑みて、ツェルニーへの愛が次第に冷めていき、もはや彼女と共に行う演奏活動が考えられなくなったところから、再び創作に気持ちが切り替えられていったと捉えられるのである。このような意味で、「ヴォルフの人生において重要な部分を占めているフリーダ・ツェルニーという人物は」ロベルト・シューマン Robert Schumann においてクララ Clara への愛がそのまま歌の年へと結びついたような直接的な創作への源泉とはならなかったが、「芸術的な停滞からヴォルフを救い出した点で、時折ヴォルフの作品において鍵を握る人物と見なされている」(HILMAR; OBERMAIER, 1978: 3) という

評価に繋がるのである。

尚、本稿では、1894年6月までの書簡、計31通を研究対象としたが、今後、この後の20通についても検討し、当時のヴォルフを取り巻く音楽的環境について、さらに考察を深めたい。

本稿は、カワイサウンド技術・音楽振興財団 平成23年度 第1回音楽振興部門 助成研究「フーゴー・ヴォルフの書簡研究 ― 音楽に対する考え方と創作状況」による研究成果の一部である。

謝辞

本研究の資料調査・撮影にあたり、ウィーン図書館の司書の方々にご配慮いただきました。厚く御礼申し上げます。

参考文献

- DRAHEIM, Joachim; HOY Susanne (Hrsg.). 1996. *Hugo Wolf Briefe an Hugo Faißt*. (Tutzing: Hans Schneider).
- GRASBERGER, Granz (Hrsg.). 1964. *Briefe an Melanie Köchert*. (Tutzing: Hans Schneider).
- HILMAR, Ernst; OBERMAIER, Walter (Hrsg.). 1978. *Hugo Wolf Briefe an Frieda Zerny*. (Wien: Musikwissenschaftlicher Verlag).
- SPITZER, Leopold (Hrsg.). 2010, 2011. *Hugo Wolf Briefe*. 4 Bände. (Wien: Musikwissenschaftlicher Verlag).
- WALKER, Frank. 1992. *Hugo Wolf*. (3 ed.). (Princeton, NJ: Princeton University Press).